

習学寮のことども：寮部報

著者	佐川，敏明
雑誌名	龍南
巻	2 5 3
ページ	7 3 - 7 4
発行年	1943-07-20
その他の言語のタイトル	習学寮のことども：寮部報
URL	http://hdl.handle.net/2298/8556

低くくようしくと頷くところが無ければならぬ。わつと湧き立つ感激は、醒めるのも亦速い。深く／＼肝に銘すべきである。くようしくこの強い決意は眞剣な、必死の生活をしてゐる者のみに見られるものである。

表面はそうでも無いが、その人に對する時何かしら壓迫を感じ力強さを感じる。そう云つた人が龍南人に段々無くなりつゝある。これこそ龍南人の最大特色であつたと思はれる。こういふ人が剛毅木訥人であり、大きい人、強い人ではあるまいか。こんな人こそくようしくと頷けるのだ。

寮生諸君よ氣魄を出せ、まだほんのこの前龍南生活を始めたばかりではないか。夢を捨てな。現實と妥協するな。信念の命ずるまゝに行動せよ。深く／＼生活を反省し、深く／＼決意を固めよ。「かくの如きが龍南生活なりしか、よし今一度」と。

龍南習學寮を深く愛し且つ天下に誇るが故にこゝに暴言を逞うして寮生諸兄に訴へる次第である。意のあるところを汲まれ、更に／＼精進されんことを切願して筆を擱く。

習學寮のことども

前惣代 佐川敏明

五高に入つてから卒業までの殆ど全てを送つた寮に就いて思ふことは限りなく續いてゐる。入寮當初の喜びも、上級生諸兄の親切なる世話振りも、第一學期の臨時試験に冷え乍ら勉強したこと

も、皆何だか夢の様である。その頃の若い潑刺とした元氣は今何處にあるのかその行方が分らぬ様な氣がしてならない。酒を飲んで暴れた人も、踊り狂ふた人も駄辯りつゞけた若き哲學者も卒業の準備に忙がしいのだらうか、それとも新らしき生命の把握に向つて出發したのであらうか。殆どその面影を見ることは出来ない。

寮は若き生命の彷徨の場所だ。灯を求める數百の魂は隣の魂に導かれ或は隣の魂と喧嘩をして之を卻け乍ら灯の方に近づいて行かねばならぬ。純眞なそして正直な魂のみがその旅を面白くそして甲斐ある行程をたどることが出来るのだ。夢をはらんでこちらに迷ふことが出来るのも若人のみに許された大きな人生の旅である。夢に生きてその中を歩き続け、その中を走り廻り力盡きて倒れることだ。そしてその夢の放浪性は一生の間、死の瞬間に至るまで保持されねばならぬ。人間は地上の巡禮者たる以上の、何者であり得ないのだから、大きい夢を抱いて手足を伸きつて旅を終るべきである。

眞に人間を感じるのも、他人を直ちに自己の心に感じるのも、この若き日以外の時に於てはあり得ないだらう。偽らざる嘘のない生活を存分にやれるのも若き人達の間に於て可能ではあるまいか。哲學も宗教も、藝術も、何も無い。ただ人間があるだけである。それらのものを最高度に表現し得る生きた人間があるだけである。その息吹が哲學であり、宗教であり藝術ではあるまいか。

「樺花咲く南國の」と口吟み乍ら武夫原を逍遙してゐる若き心には生命の永遠を感じる力があり、力に無限の信頼を置き得るだらう。

う。じつと暮れ行く西空を凝視して始めて自己の何者たるかを知るのである。

力強い沈黙を有してゐる静寂の中に、我が身の幸をひし／＼と感ぜさせられる。國に報ずるの道はそれは、純粹さ、正直、誠だけである。最大の誠をつくして止まんのみ。

寮生活を振返つてみると、數多の想出の中に以上のことが強く感ぜられてくるのである。(十八、六、二十一、記)

寮を去りて

前窓代 加茂野 明

住み馴れた寮——私を導き私に教へ私に自己反省の機會を與へ心から誠心から私を抱いて呉れた寮を、得も言はれぬ名狀し難い複雑な氣持の内に去つてやつと落ち附いた所に寮報に一筆寄せとの要求に應じて、過去の私の寮生活を回顧しつつ筆を執つてゐると、又複雑なものに襲はれるのをおぼゆる。

寮上級生としての生活、特に轉換期に於ける寮、新しい傳統創造の胎痛の最中に於ける寮上級生の歩み、それは實に苦難そのものである。常に矛盾に満ちた歩みである。

自己の廻す車輪は常に空廻りのみを繰り返す。自己の廻し方には過ちはないはずである。至誠を以て廻はしてゐるはずなのではある。然し相手の車輪は空廻りを繰り返すのみ。晩秋の黄昏に似た寂莫感!!

武夫原の夜空には無情にも冷たたりおりおんが十字を切るのみ。汝には指導するなんて大それたことをする資格は無んだ。やめろ! やめろ!

指導される立場にある者と何等變ることは無いではないか。馬鹿なことはやめろ!

とき／＼やくが如く北斗は斜に走る。

冷き夜氣がしつとりした夜露と共に身邊に迫る。淋しい。

弱い、甘い、弱かつたんだ。

私は自己の苦しみ、自己の苦しい努力に對して、優しい慰安を求めてゐたのだ。慰めの言葉を強いて求めてゐたのだ。私は自己に余りにも甘かつたのだ。功を求めてゐたのだ。

馬鹿野郎!

成程私には指導者としてのあるものには缺けてゐるかも知れない。然し私には若さがあるはずだ。熱と至誠とはあるはずだ。その熱と至誠とをもつて強く／＼車輪を動しなほさう。かく自己に誓ひつつ、その熱と至誠とをもつて一步一步信念の命ずるままに進み乍らも、亦何所からか心の中に破綻が湧く。

一步一步めなくなつて失ふ。

その破綻は何所から來るか?

自己の寮生活の根柢に横はる矛盾。

寮には五十有余年の歩みを續けてゐた内に自治的に決められた